

〔研究論文〕

オランダのイエナプラン教育とオランダ社会のかかわりについて**椎野信雄，上谷香陽**

〔Article〕

On the Relationship between Jena-plan Education and Dutch Society**Nobuo SHIINO Kayo UETANI****Abstract**

This paper tries to grasp the actual situation of practical activities of Jena-plan education in Dutch schools on the spot, based on the findings of school visits and workshop in the Jena-plan education training in which we participated. It is confirmed that Jena-plan education developed in the Netherlands after the late 1960s, against the background of the transformation of lifestyle in Dutch society towards civil society (=domains) formation. It was able to be understood through the training that what school education in the Netherlands ought to be suggests not only the education problem in the narrow sense but also the problem of the ideal way of society.

0 はじめに

脱近代社会における〈公〉と〈私〉と〈共〉の3元領域における〈私〉領域において、「ライフスタイル」の変容が伴うことにおいて、〈私〉生活と〈公〉生活の関係が変容する。さらに〈私〉生活と〈共〉生活の関係にも、そして〈共〉生活と〈公〉生活の関係にも変容が伴うことになる。これらの生活の変容をライフスタイルの変容と概念化することにする。公私二元論・政治経済の二元論における近代社会から脱近代社会のライフスタイルに変容するのだ。本研究は、この「ライフスタイル」の変容と教育のあり方の変容の関わりを見出す研究の一環である。21世紀の市民社会＝〈共〉領域形成における「ライフスタイル」の変容と教育のあり方の変容をオランダ社会に見いだすことが本研究の内容である。具体的には、オランダのオルタナティブ教育の代表であるイエナプラン教育の実情把握とその教育を支えているオランダの市民社会型「ライフスタイル」の実情把握のための研究である。

本稿は、参加したイエナプラン教育研修でのワークショップや学校視察による知見をベースに、学校現場におけるイエナプラン教育の実践活動を実情把握したものである。そして1960年代末以降オランダでイエナプラン教育が発展した背景に、市民社会＝〈共〉領域形成に向けたオランダ社会のライフスタイルの変容があることを確認する。研修を通して理解できたことは、オランダの学校教育は、単に狭い意味での教育の問題ではなく、社会のあり方の問題を示唆していることである。

1 イエナプラン教育研修の概要

2013年3月10日～15日、オランダのイエナプラン研修会社JAS:jenaplan advise & scholing(イエナプラン・アドバイス・アンド・スクーリング)による第3回オランダ・イエナプラン教育研修に参加した⁽¹⁾。研修の概要は以下の通りである。3月10日午後：ウエルカムディナーパーティー。3月11日午前：イエナプラン教育の概要についてのレクチャー、午後：イエナプラン創始者ペーター・ペーターセンについてのレクチャー(講師Hubert Winters, Freek Velthausz)。3月12日終日：Sint Paulus(katholieke jenaplan Bssisschool)小学校訪問(Leeuwarden市)。3月13日午前：ワールド・オリエンテーション、ヤンセンの自転車についてのレクチャー(講師Hubert Winters, Freek Velthausz)、午後：マルチプル・インテリジェンスについてのレクチャー(講師Hanneke Lokhoff : Knapvilla)。3月14日午前：シティズンシップ教育、いじめ対策プログラムについてのレクチャー午後：ストーリーライン・アプローチ/セレブレーションについてのレクチャー(講師Hubert Winters, Freek Velthausz) 3月15日午前：jenaplanXL中等教育学校訪問(Zwolle市)、午後：解散。以下研修で得た知見を適宜補足しながら概観する。

2 オランダ個別教育の背景⁽²⁾

オランダで公教育が始まったのは、ネーデルランド共和国時代の1801年の教育法の成立の時からである。フランス革命の啓蒙思想の影響を受けた公教育の理念は、宗教性を排除した中立性の原則を主張した共和派のものだった。その後ナポレオン時代の(フランス併合)後でオランダは、王政派の勢力が強くなり、1815年に正統派プロテスタントの新王国となった。「反革命主義」や「キリスト教歴史主義」の立場から中立性に異議申し立てがなされていった。キリスト教が普遍宗教であり、政教分離は不可能であるという保守的な主張が影響力をもつようになったのだ。公立学校だけでなく、キリスト教的信条に従った私立学校も、国庫補助を受けることのできる平等の原則が求められていったのである。

オランダでは、1917年、憲法第23条の改正によって「教育の自由」が確立した。つまり公立学校と私立学校の公的補助の平等の原則が明記されたのだ。その結果として、キリスト教的私立学校が公的補助を得ると同時に、啓蒙主義的中立派の私立学校も公的補助で設立できるようになった。教育の自由とは、(学校)設立の自由・(教育)理念の自由・教育方法の自由という三つの自由から成っている。以来、一定数の生徒が集まることを証明できれば、市民団体が私立学校を建てることのできるようになった。どのような教育理念、宗教的倫理に基づくものかは問われない。教育方法についても、学校や教員の自由裁量権が広く認められている。公立校同様、学校の校舎や施設は地方自治体から提供され、登録された生徒数に応じて国庫補助金を受けることができるのだ。

オランダでは、20世紀初頭の欧米先進国における教育改革運動で生まれた様々なオルタナティブ教育——ダルトン(プラン)教育(米)、モンテッソーリ教育(伊)、フレイネ教育(仏)、シュタイナー教育(独)——の理念に基づく実験的な学校教育の試みが、すでに1920年代から始められていた。しかし、1960年代前半まで数はわずかであり、1960年代後半から増加したのである。

1960年代後半、深刻化する環境汚染やベトナム戦争を背景に、オランダでも「プロヴォ(provocativeの略)」と呼ばれる若者が、産業社会や冷戦構造を支える既存の秩序や体制を疑問視する声を上げた。この異議申し立ては、いわゆる「公」的な領域の問題だけでなく、婚姻関係に基づか

ないパートナー関係、婚姻外の性行為、同性愛、墮胎の是非など、従来「私」的な領域とされてきた諸問題にもおよんだ。欧米先進国でほぼ同時期に生じた近代社会の構造転換を促すこの動きは、多様な価値観を持った市民の社会参加を要請した。このような動きを背景に、オランダでは1970年代以降、画一的な教育の持つ問題点に関心が高まり、個々の子どもに合わせた教育が求められるようになった。それに応えるものが、さまざまな種類のあるオルタナティブ教育(現在、全体の1割700校ぐらい)だったのだ。以降オランダでは、画一的な教育方法に対する疑問や批判が高まり、教育改革の必要を求める声も高まっていったのである。

1981年7月に新しい初等教育法が制定された。幼児教育と初等教育が統合されて、4～12歳までの8年教育となった。また、従来の科目時間割にはこだわらない、より柔軟なカリキュラムの作成が認められるようになった。教育改革の方針は、「画一教育から個別教育へ」というものになった。この法律を制定するまでに、教育者や保護者が参加した多くの議論があり、また、個別教育の実施のための教材作りや教員に対する研修制度作りがあった。そのため、初めて草案が出された1970年から10年以上をかけて法律が制定されたのである。このように教育改革がゆっくりと、また、国民の理解を得ながら進められたことで個別教育への関心も高まった。そして、現在のオランダでは、個別教育が主流となっているのである。

3 イエナプランの特徴

子どもの自発的な学びへの関心や共同性を重視するイエナプランは、1920年代にドイツのペーター・ペーターセンによって創始された³⁾。イエナプランがオランダで全国的に紹介されたのは、1960年代のことである。以降、オランダのイエナプランは発祥国ドイツ以上に広く普及し、1970年代以降のオランダ教育改革の代表的なモデルとされるほどの影響力を持つようになった。イエナプラン校はオランダに約200校ある。大部分は4才から12才までの小学校であるが、12才から15才までの中学校も数校ある。それぞれのイエナプラン学校は、教育哲学と枠組みを共有したうえで、それぞれの地域の状況や歴史に応じて独自の学校作りを展開している。

イエナプラン教育からみると、従来の教育において子どもたちは、一昨日の方法で、昨日のことを学び、未来の問題を解かされているようなものだという。例えば、今子どもたちはスマートフォンを使っているのに、先生たちはカセットテープで教えようとするようなものだ。イエナプランでは、読み書き能力はもちろんのこと、子どもたちが自分で計画を立ててプロジェクトに取り組めるようにすることが重要である。子どもたちを、責任感を持った(responsible)アクティブな市民にするのが目標である。レクチャーでは、イエナプランを象徴する1枚の写真が紹介された。大人と子どもが手をつないでいるが、大人が子どもの手を掴んでいるのではない。子どもが大人の手を掴んで導いているのである。

良い教育とはどのようなものなのだろうか。テストで皆が高い得点を取れるようすることだろうか。そうした教育では創造性は評価されない。テストでは重要視されないそうした能力は見落とされていく。落第レベルを無くそうとしても、成績とは相対的なものであり、常に落第レベルの生徒は出てくるのだ。ここで講師のVelthaus氏は自らの経験として、次のようなエピソードを紹介した。オランダでは、誕生日の子どもがクラスメイトにお祝いをあげる習慣がある。彼の娘は、自分が集めていたシールを3枚ずつあげようとし、いったい全部で何枚必要なのかを試行錯誤して数えていた。3枚が26人で78枚だとわかった時、彼女はかけ算が何の役に立つのか初めて実感をもっ

て「わかった」のである。子どもは、学校で習ったことが学校の外でどう使われるかがわかった時に、本当の意味で「わかった」と納得する。イエナプランは、そうした教育を重視するのである。

イエナプラン教育の特徴は以下の4点にまとめられる。①子どもたちがアクティブであること。たとえば、イエナプランの子どもたちは、イブニング・パーティーを自分たち自身で組織することができる。②子どもたちが一緒に仕事(work)＝学習をすること。イエナプランでは対話、遊び、仕事(学習)、イベントを行う。③異年齢(3学年)のグループを作ること。学校は小さな社会である。違う年齢の子どもが一緒にいることで、小さいとはどういうことか、できないとはどういうことかを学ぶ。同学年の中では強くなく、できないことがある子どもも、下の学年の子を世話する中で自分は色々なことができるのだとわかる。3学年にすることで子どもたちはじっくりお互いに知りあうことができ、1年ごとにメンバーが入れ替わってもクラスの文化が保持される。④生きる学びを行うこと。「世界を教室に持ち込もう」がイエナプランのスローガンである。たとえば、新聞の中の小さな記事でもよい。小さなアクチュアリティから出発し、思いつく疑問を調べ、調査結果をお互いに発表し合う。この時、教える側も自分が興味関心をもっていることを示さなければならない。「なぜだろう?」「どう思う?」という問いかけができなければならないのだ。

イエナプランは、指導要領依存型のマニュアル教育ではないが、かといって、教師の働きかけが全くない自由放任でもない。また、イエナプランの教師は、その人だけにしかできない名人芸的授業を見せるパフォーマンスや職人でもないのだ。もしその人がいなくなってしまうたら授業が成り立たない、替えがきかない、そのような教師が求められているのではないのである⁽⁴⁾。

4 ワールド・オリエンテーション

イエナプラン教育の小学校では、一つのテーマを決めて科目横断的に行う「ワールド・オリエンテーション」という総合教育がある。そもそもイエナプランでは、小学校はあえて科目の枠を重視しない教育を行っている。ペーターセンは、子ども自身の発見や観察を尊重し、子どもたちが協働で仕事をすることによってお互いの相互行為の中から学び合い、協力して何かを作りあげingことを重視した。このようなペーターセンの考え方を発展させ、オランダのイエナプラン教育実践者が考案したのが、ワールド・オリエンテーションである。

ワールド・オリエンテーションは自然や文化・社会にまつわる様々な事象を扱うが、理科や社会科の授業として行われるのではない。教科科目の枠にとらわれず、まずは子どもたちの経験から出発し、国語、算数、表現活動、外国語にまで広げて指導する。子ども自身の日常生活の様々な場面を、学習のきっかけにするのである。人間を取り巻いている世界は自然と文化・社会に分割されることなく、相互関連した7つの「経験領域」として捉えられるのだ。7つの経験領域とは、作ることと使うこと、環境と地形、巡る一年、技術、コミュニケーション、共に生きる、私の人生である。子どもが日常の生活の中に学習のきっかけを見つけることができるように、子ども自身の経験につながる領域からテーマが選ばれる。多くの場合、学校全体のテーマを4～5週間に1個ずつ、年に8個ほど決めて授業が行われる。子どもたちは、小学校8年間の間に、通算64個ほどのテーマと出会うことになる。

オランダ・イエナプラン教育協会は国立カリキュラム開発研究所(slo)と共同して、ワールド・オリエンテーションのカリキュラムを開発した。ワールド・オリエンテーションを行う教員を育てるためのカリキュラムもある。今日では、教育文化科学省の「中核目標」にある「人類と世界へのオ

リエンテーション」という総合科目として、一般の小学校にも取り入れられている⁶⁾。

ワールド・オリエンテーションの授業は、教師も生徒も平等な価値を持っているという前提で行われる。教師も生徒と同じ価値のある者としてグループに参加する。むろん、地位や役割は違うのであり、全く同じということではない。しかし、両者は人間として平等な価値を持っていると考えられているのである。

これまでの通常の授業では、子ども同士のグループワークを行う時にも、教師を「生産者(提供者)」生徒を「消費者(受領者)」とみなしがちである。たとえば日本では、遊び時間に子どもたちが自分の作った物を先生にさかんに見せに来る。先生はいちいちそれを評価しなければならず、大忙しになる。ここで起きているのは、子どもたちは、先生から評価を受けることでやっと自分が良いとわかるという事態である。イエナプランでは、自律(autonomy)を重視する。子どもたちが自分でどう評価するか、自分で自らの基準で良いとわかることが大事である。イエナプランの評価方法であるポートフォリオは、子どもたちに、自分で一番誇りに思うことは何か？次に何をやりたいか？などを自己評価させる。世界へ方向づけをするのは、大人としての教師ではなく、子ども自身なのである。

ワールド・オリエンテーションは経験すること、発見すること、調べることを重視する。鳥はなぜ飛ぶの？ミミズには目があるの？イルカはずっと泳いでいるけどいつ寝るの？蛇口をひねったらどうして水が出て来るの？電気にさわるとなぜ死んじゃうの？牛乳パックはなぜリサイクルボックスに入れないといけいないの？などの子どもたちの問いが出発点になる。重要なのは、問いに対して答えを出すことではない。答えから問いを引き出すことだ。答えを出してしまえば、科学はそれで終わってしまうのである。一つのマッチ箱があれば、火傷はどうしてするのだろうか？(理科)、箱にドイツ語やスウェーデン語が書いてあるがマッチはそれらの言語で何と言うのだろうか？(言語)、マッチ箱を教室に並べたら何箱必要だろうか？(算数)など、様々な領域に広がる問いが引き出せる。この場合、大きな概念ではなく、小さく問いを立てることが大事である。

学びを進めるためには構造が必要である。ワールド・オリエンテーションにも7つの構造がある⁶⁾。①Prickelen(excite)：まず子どもたちの好奇心を引き出す。「何をやるんだろう」というモードにする。このことは、子どもたちのことを知っていれば知っているほど可能になる。②Leervragen(learn questions)：問いを集める。教師自身が「興味を持っているよ」という態度であることが必要である。自分は何でも知っている、というモードが一番つまらないのだ。③Wie gaat wat doen?(Who is going to do what?)：具体的なテーマを決めて、発見し、実験し、調べる学習の計画を立てる。一人一人ですることと、皆ですることを分け、教師自身も自分の課題として仕事を引き受ける。(①と②の過程を抜きにしたら、子どもを無視することになるのではないかと、たいていの教師は③から始めてしまうのだ。)④Ervaren, ontdekken, onderzoeken(experience, discover, investigate)：実際にやってみる。小さなことを切り捨てない。一人一人との対話、全体との対話を積み重ね、教師自身も一緒にやる。子どもたちに本を読みなさい、調べなさいと言ったら、教師自身も一生懸命にやらなければならないのだ。どの子どもに対しても、オープンでなければならない。⑤Prestaties(performance)：表現する。ダンスでも、劇でも、パンケーキ・パーティーでも何でもよい。成功経験が大事である。例えば、話すことが嫌な子どもに無理に話しをさせて、嫌な思いをさせてはならないのだ。⑥Vastleggen(capture)：学んだことをきちんと保管する。やったことを振り返る。1何を学んだか。2アプローチ、方法はよかったか。この2番目の問いが学びの重要なところだ。うまく行かなかった時は、グループでなぜうまく行かなかったのかを皆で考える。対話

の中で、子ども同士が失敗の原因を発見し話し合うことが重要である。言語訓練がとても大事なのである。⑦ Kerndoelen (core goals) : 教師には、子どもたちをどこに向かわせたいという意図がある。これを確認する。

5 マルチプル・インテリジェンス

マルチプル・インテリジェンス (multiple intelligences) とは、アメリカのハワード・ガードナー (Howard Gardner) (ハーバード大学教育学大学院教授) が脳科学に依拠して提唱した、能力についての一つの考え方である。彼は、人間の得意能力 (intelligences) を、音楽・リズム、視覚・空間、言語、論理・数学、身体・運動、人間関係、自己内省、自然などの諸領域に分類した。イエナプランではこの考え方を異年齢の子どもたちのグループ作りに利用し、性格や得意分野が異なる子供たちを意図的に組み合わせている。また校舎教室には、様々な刺激を引き出す教材や遊びの素材を集めたゾーン (読書、人形遊び、おままごと、積み木遊び、砂場、お絵描き、観察、音楽、コンピューター、お話・リスニングなど) を設置し、子供たちがそれらを利用しながら自らの潜在能力に気づき力を伸ばせるよう、きっかけを与えている⁽⁷⁾。

研修で行われたワークショップの講師 Lokhoff 氏は、30年間の教師経験があり、14年間校長も務めた。その経験に基づけば、子どもたちが楽しく快適だと感じるほど学びも良くなるという。子どもたちのためとはよく言われるが、実際はそうになっていないことも多いのである。脳科学の知見によれば、わかっていることを覚える時と探求をしている時では、脳の機能が異なっている ('Wow effect')。Lokhoff 氏は、オランダの教育はこの効果をよく使っていないのではないと考え、10数年前からマルチプル・インテリジェンスの考えに依拠した教育に取り組み始めた。

ガードナーは能力を intelligences、すなわち複数形にした。ここがポイントである。子どもたちは必ず何らかの得意分野を持っている (たとえば、音楽に秀でていれば、「音楽スマート (英語 smart, オランダ語 knap)」と呼ばれる)。Lokhoff 氏は、こうした考えに基づいた教育をやりたいと考えたが、当初はオランダには何も無かったのだ。こうした複数の能力の見方、評価の仕方を自分たちで作らなければならなかったのである。

学校では最初は25人のチームだったが、10人しか同意してくれなかった。マルチプル・インテリジェンスの考えに基づいた教育とはどのようなものか、自分たちで実際にやりながら学んでいったのだという。オランダの学校は予算が少ない。まずは、それぞれのインテリジェンスを伸ばすための教材を置いたゾーン作りから始めた。やがて残りの15人も興味を持つようになった。親や教職員も興味を持ち、子どもたちのどんな能力をどのようにしたら伸ばせるかについて活発な議論がなされるようになった。たとえば、ゾーン作りの際には、クッションに転がって本を読んでもよいのではないか、などの意見を出し合った。演劇 knap、建設 knap など、ガードナーが指摘した以外の様々な能力を見出していった。子どもたちが皆で一緒に木で家を建てたりもした。世の中ではいろいろな能力が必要であることの象徴である。

この試みに対して学力が落ちるのではないか、という親たちの心配があった。しかし10年間の調査の結果、どの子どももたいへんな勢いで伸びていったことがわかった。Lokhoff 氏たちは、一人ひとりの多様な能力を評価する方法を開発してきた。これは一人ひとりの子どものレッテル貼りをするのが目的ではなく、別の側面を見るためにやることだ。伝統的なやり方では見落とされる能力が余りに多い。それを少しでも減らすためにこうした方法を参照するのである。Intelligence と

いう語について、「頭が良いこと」を指すというイメージがあるので、skillにした方がよいのではないかという議論もなされている。何か新しいことをやるにはリスクはつきものだが、やりながら良くしていけばよい。だからこそ、グループで考えて行くことが大切なのだ、Lokhoff氏は強調する⁽⁸⁾。

6 ピースフル・スクール

ヨーロッパ評議会(Council of Europe)は、2005年を「教育を通じたシティズンシップのヨーロッパ年」(European Year of Citizenship through Education)と定めた。1993年に発効されたマーストリヒト条約(EU設立条約)によって、ヨーロッパ通貨統合、ヨーロッパ中央銀行制度の発足、EU内の人の移動と就労の自由およびヨーロッパ・シティズンシップが認められていた。ヨーロッパでは国家を超えたシティズンシップが議論されている。また、ヨーロッパの諸国では各国レベルだけでなく、国際的にもシティズンシップ教育の取り組みが進んでいる。ヨーロッパ評議会でも、シティズンシップ教育が注目されているのだ。

ヨーロッパ評議会は、1997年に「民主的シティズンシップ教育(Education for Democratic Citizenship)(以下、EDCと略)の推進を決議していた。2002年に閣僚委員会は、加盟国にEDCの勧告をした。欧州評議会がシティズンシップ教育の推進に着手したのは、ヨーロッパの民主主義の危機意識があったのだ。ベルリンの壁崩壊後の東欧諸国における民主主義教育の必須性、若者の政治離れへの懸念が背後にあるとされている。

ヨーロッパ評議会においては、EDCへの取り組みは、各国の課題として加盟国で様々である。またEDCの各国への影響も様々である。欧州評議会の取り組みの評価は、各国の実践活動や情報収集を共有し、シティズンシップ教育の意義や目的や概念について合意を形成していくことにあるのだろう。欧州評議会には、そのような専門家のネットワークや協力関係が形作られているのである。

ちなみに、EUでも2000年にリスボン欧州理事会が「知識基盤型経済圏への移行」を目指すリスボン戦略が打ち出されて、2010年までに達成すべき13の教育目標が掲げられている。その教育目標に「アクティブ・シティズンシップや平等な機会と社会的結束の支援」がある。「シティズンシップ教育」とは、「人々が自分の生活の主役になるという経験を共に創造していく社会的結束の方法である。自律・責任・協働・創造を学び実践する機会は、困難に対峙する時の専門知識や個人価値を発展させることが可能になる」と定義されているのだ。

オランダでは、2007年に初等教育と中等教育でシティズンシップ教育が義務化された。グローバル化の進行、異文化交流の拡大、非西洋諸国からの移民の増大による文化摩擦、物質主義や個人主義の浸透、自分勝手主義の蔓延がその背景にあると言われている。義務化といっても、オランダの教育文化科学省がやったことは、ガイドラインを示すだけで、どう教えるかは学校の自由裁量に任せたのである。

オランダでは各学校に与えられた大きな自由裁量権のもと、教育文化科学省のガイドラインをふまえながら、それぞれの学校のビジョンと校風に合う形で、「よい市民」とは何かについての対話を深める授業が展開されている。「ピースフル・スクール・プログラム」は、もともとニューヨークのクイーンズ地区で生まれた、子どもたち間のコンフリクト(対立や喧嘩)を子どもたち自身で解決するためのプログラムである。これを基に、オランダの教育サポート機関がユトレヒト大学のウィ

ンター (Micha de Winter) 教授の指導で、シチズンシップを高めるための体系だった授業指導案に作り直したものである。この「プログラム」は今日 350 校以上の小学校で採用されている。

オランダの「ピースフル・スクール・プログラム」は、社会の中で市民として行動するとはどういうことかを、単に知識としてではなく、様々なワークショップを通して子どもたちに実際に「練習」させることを目的としている。ライセンスを取ったトレーナーが 2 年間かけて教員をコーチングするほか、保護者に対するワークショップも行われる。学校で起きるコンフリクトを子どもたち自身の手で解決できるよう、上級生から希望者を募り、仲裁者(メディエーター)という資格取得者を育成する講習も行っている⁽⁹⁾。

研修では、KiVa というフィンランド産のいじめについてのプログラムについてレクチャーを受けた。2013 年現在オランダのグローニンゲン大学で、このプログラムの効果を調査中であり、来年には導入される予定という⁽¹⁰⁾。研修では、KiVa プログラムの主旨が説明された。

いじめは誰の問題なのか。いじめている子どもか、あるいはいじめられている子どもか。いじめは、二者だけの問題ではない。いじめはそれを見ている人が必要である。いじめをする子どもは、自分のやっていることを見ている観客を必要とする。それゆえ、いじめはグループ全体の問題として捉える必要があるのだ。逆に言えば、いじめを解決するにあたっては、誰でも何らかの役割を果たせることになる。KiVa プログラムは、どんな小さなことがらにも気づけるように、保護者にも子どもとどのように会話したらよいかについて教えている。10 人に 1 人の子どもがいじめられているが、いじめのサインは 5 人に 1 人しか出していない、という統計もある。

いじめを見ている観客たちは、いじめの責任は直接的にはないが、いじめを止める責任はある。子どもたちにとっては、友達の沈黙が一番の敵である。いじめられたことよりも、友達が何も言ってくれなかったということの方がずっとつらいのである。KiVa プログラムは、子どもたちが「もういじめをやりたくない」と望むようになることを目的とする。そもそも、子どもたちに「いじめをするのが好きか」と問えば、皆 NO と言うのである。いじめをする子どもが人気で注目されている場合、多くの子どもはいじめの側につこうとする。近づくほどに犠牲者にならず済むからだ。グループの構造を把握する必要があるのだ。

「喧嘩」と「いじめ」は違う。「からかう」と「いじめ」もまた違う。互いに行っているうちはそれは「からかい」だが、どちらかが一方的に行うようになればそれは「いじめ」になる。①目的を持って行う、②何度も何度も行う、③行う側がいつも強い、この 3 つの要件がそろった時に「いじめ」となる。それをされた相手がどう受け止めるかが重要である。また、この仕組みを子どもたち自身が知っておくことが大事である。まれに教師の注目を集めたい、「どうしたの?」と言ってもらいたいがためにいじめられる子になる子どももいる。だから③の要件を見過ごさないようにする必要がある。

いじめには、①言葉によるもの、②関係性を壊すもの、③モノを壊すもの、④肉体的なもの、⑤デジタルにおけるもの、がある。⑤は単独では起きないので、⑤を発見したら①-④も起こっているのではないかとチェックする必要がある。

日本からオランダの教育を視察に来た人々はしばしば、「オランダにはいじめがないでしょうね」と言うが、そんなことはない。あつてはならないものだとはタブー視しては、いじめについて語れない。まずは、いじめはどこでも起こるものだとということを受容しなければならない。

7 ストーリーライン・アプローチ

ストーリーライン・アプローチとは、スコットランドで開発された、お話を作りながら様々なことを調べ学ぶ授業の方法である。研修ではワークショップ形式で、実際にストーリーライン・アプローチを体験した。子どもたちには例えば、①フローリス9才、②彼は小さな島に住んでいる、③彼はもうすぐ引っ越す、④彼は鳥が好きである、⑤彼は少し内気である、⑥彼には2人の友達がいる、という設定が提示される。項目ごとに、例えば、フローリスはどんな外見の子？友達はどんな子？彼の部屋はどんな部屋？誰と一緒に住んでいる？どんな鳥が好き？など、*how do you think?*(あなたはどう思う?)形式の問いを子どもたちにどんどん出してもらい、物語を膨らませて一緒に作品を作る。こうした問いは、「間違い」というものが存在しない問いである。この方法によって、カリキュラムを統合された全体として発展させることができる。夢中になって物語を発展させることで、子どもたちは自分自身で様々なことがらを学んでいく。

たとえば④の鳥について、鳥好きのフローリスが持っているであろう鳥の本を作ってみる。どんな鳥がいるだろうと想像力を働かせながら、子どもたちは鳥について色々調べてリストにする。物語を膨らませていくことは、地図の勉強にも数学の勉強にもなりうる。「二人の友達が、転校先でフローリスが友達をうまく作れるよう、アドバイスを手紙に書いた」という設定で、実際に手紙を書いてみる。架空の物語だが、クラスにいる内気な子にとっては実際のアドバイスになる。「転校先の先生に、フローリスについての手紙を書いた」という設定なら、今のクラスの先生にとってのアドバイスになる。「鳥が窓に当たって落ちてけがをしたので、病院に行った」という設定なら、鳥の行く病院はどんなところだろう？鳥をどうやって治療するのだろうか？などの問いに基づき、学校の近くの動物病院に実際に行ってみるのである。

目の前にあることがらを直接取り上げるより、架空の事象で議論する方がやりやすいこともある。これを2ヶ月かけてやる。教師は、子どもたちが何をやりたいのかをいつも見守っていく必要がある。イェナプラン教育は、ストーリーライン・アプローチを、ワールド・オリエンテーションの一つのやり方として取り入れている。架空の物語であるが、現実に近い。現実を使いながら、作業を進めていく。家族設定一つとっても、教師の側が暗黙のうちに「ふつう」の家族を想定していても、子どもたちは「普通でない」家族をどんどん出してくる。何を目標にするのか、これが肝心である。構造はしっかり立てて、子どもたちの反応に応じて臨機応変に対応していくためには、緻密に準備をする必要がある。ストーリーライン・アプローチのサイトがあり、教材を購入することができるようになってきている⁽¹¹⁾。すでにタイやシンガポールでも学校教育に用いられているようである。

8 考察

視察した小学校では、授業の開始や終了を伝えるチャイムがなかった。子どもたちは次に何をやるのか把握していて、自分から動いて授業の相互行為を作り上げていく。見学した9～11才のクラスでは、授業の間の短い休み時間に、子どもたちは持参した軽食を思い思いに食べていた。時間になると先生がやって来て、さっそく次の授業を始める。授業開始直後はまだ食べたり飲んだりしている者もいるが、先生に「食飲をやめなさい」などという注意を受けることもなく、やがて今やるべきことに集中していく。

授業内の相互行為も多様である。ある6～8才のクラスでは、見学した30分間のうち最初の20

分ほどは、子どもたちはグループに分かれた席に着席し、各自がプリントをやり、できた者から先生に見せに行きチェックをもらっていた。20分が過ぎた頃、子どもたちはその作業をやめ、席を移動し大きなサークルを作った。メダルを掛けた1人の子どもが皆にお菓子を配っている。先ほどまでの静寂から一転、皆楽しそうにしている。クラスメイトの誕生日会が始まったのだ。この間、先生からの指示は一切ない。一日のスケジュールを子どもたち自身が把握し、自分たちの判断で動き、その都度の学習に応じた相互行為を作り上げているのである。

ワールド・オリエンテーションに象徴されるように、イエナプラン教育は、教室の中で完結するものではなく、常に、教室の外の社会のあり方と連動した学習のあり方を模索している。イエナプラン教育のコンセプト(リヒテルズ2006:220-231)は、1970年代以降のヨーロッパ先進国における近代社会の変容(たとえば、個人のあり方、家族のあり方、労働のあり方などの変容)をふまえて考案されている。イエナプラン教育を初めとしたオランダの学校では「自立性」と「共同性」を子どもたちに身につけさせようとしている。その背後にはヨーロッパが移民社会になった社会的現実があるのだろう⁽¹²⁾。オランダのイエナプランの教員たちは、海外の優れた教育法を積極的に取り入れ、実際の学校教育の中で試行錯誤しながら換骨奪胎し、独自のカリキュラムを編み出している。そこで目標とされているのは、自ら考え行動し、他者と協力して社会を作っていく人(「市民」)を育て、市民社会を形成することだと言える。

今回の研修では、レクチャーでその理念の理解を深め、小中学校の視察でその理念が実際の教室での学習の相互行為にどのように具現されているかを垣間みることができた。

付記：本研究は、文教大学国際学部共同研究費(平成24年度)の研究助成を受けて行った「市民社会型ライフスタイルの変容と教育のあり方の変容のかかわりについて—オランダのオルタナティブ教育を事例として—」(2012年度)の研究成果の一部である。

注

- 0) 執筆分担0、2、6章は椎野が1、3、4、5章は上谷が主として執筆。7章は共同。
- 1) 合宿所 Het Bovenveen, Ruinerweg in Echten (エヒテン)。
JASのサイト：<http://www.jenaplan.nu/> (2014年5月12日確認)。
研修所のサイト：<http://www.hetbovenveen.nl/> (2014年5月12日確認)。
- 2) リヒテルズ(2004)(2006)も参照。
- 3) ドイツの教育哲学者ペーター・ペーターセン(Peter Petersen)は、1884年デンマーク国境近くのドイツ北部の州で生まれる。1923年イエナ大学に着任、大学実験校で新教育を始めた。1926年スイスで開催された新教育フェローシップ(NEF)第4回国際会議において、ペーターセンはイエナ大学で行っている自らの実験的な教育について発表した。この会議以来、ペーターセンの新教育は「イエナプラン」と呼ばれるようになる。同年ペーターセンは、会議での報告を基に、後にイエナプラン教育のバイブルとなる『小さなイエナプラン』を出版する(リヒテルズ2006:143-159)。研修のレクチャーによれば、ペーターセンは大学においてイエナプランの研究はしたが、良い教師というわけではなかった。また彼は、家庭的な人間ではなく、孤独な人だったようである。
- 4) リヒテルズ(2010:85)の表を参照。

- 5) ワールド・オリエンテーションについてはリヒテルズ (2004:130-138)(2006:109-128) も参照。
- 6) イエナプランでは、この7つの構造を自転車の構造のとえで説明する(「ヤンセンの自転車」)。
- 7) マルチプル・インテリジェンスについては、ガードナー (2001) やリヒテルズ (2010:52-56) も参照。
- 8) レクチャーの後、合宿所に併設された Knapvilla という施設に設けられた、各インテリジェンスを伸ばすための教材を置いたゾーンを回った。各ゾーンには、長年かけて集められた様々な教材や遊びの素材がたくさん置かれている。その様子は、<http://www.knapvilla.nl/>(2014年5月6日確認) でも見ることができる。
- 9) ピースフル・スクールについての以上の説明については、リヒテルズ (2010:91-145) も参照。
- 10) KiVa プログラムについては <http://www.kivaprogram.net/program> (2014年5月6日確認) を参照。グローニンゲン大学の調査については、2013年10月15日に、KiVa プログラムによりいじめの訴えが50%以上減ったという結果が発表された。
<http://www.rug.nl/news-and-events/news/archief2013/nieuwsberichten/finnish-anti-bullying-programme-reduces-bullying-by-over-fifty-percent-in-the-netherlands> (2014年1月22日確認)。
- 11) http://www.storyline.org/Storyline_Design/Welcome.html (2014年5月6日確認)
- 12) 以下の公立小学校の校長先生の言葉が象徴的である。「移民の子どもたちがやって来るようになったことで、私たちは今オランダの文化と異なる彼ら移民たちの文化の問題に直面しています。トルコ人やモロッコ人の子どもたちは、何を聞いてもハイと答える。でも、本当は、心の中では、ハイとは思っていないことがあるのです。多分、彼らの文化では、ほかに逆らわず同調するように育てられているのでしょう。けれども、・・・私たちが行っている学校教育・・・は、時には、意見がぶつかり合わなくてはなりません。ぶつかって初めてお互いを理解するし、その時にどのようにして共同作業を進めたらいいかを学ぶきっかけになります。いつも、何を聞かれてもハイを答える、ぶつかることをはじめから避ける子どもたちには、共同するというのをどうやって教えたらいいか、その出発点の段階で、すでに文化的な背景が障害となっているのです。」(リヒテルズ 2006:37) この「トルコ人」は日本人かもしれないのだ。日本人が市民社会の形成において抱えている問題に共通点が見いだせるのではないだろうか。

参考文献

- リヒテルズ直子『オランダの教育—多様性が一人ひとりの子供を育てる—』平凡社 (2004)
- 『オランダの個別教育はなぜ成功したのか—イエナプラン教育に学ぶ—』平凡社 (2006)
- 『残業ゼロ授業料ゼロで豊かな国オランダ—日本と何が違うのか—』光文社 (2008)
- 『オランダの共生教育—学校が〈公共心〉を育てる—』平凡社 (2010)
- ガードナー、ハワード (松村暢隆訳)『MI: 個性を生かす多重知能の理論』新曜社 (2001)

